

小-31

## 唾液の漏出により舌下に偽腫瘍性炎症を形成した犬の1例

○酒井俊和<sup>1,2)</sup> 賀川由美子<sup>3)</sup> 廉澤 剛<sup>1,2)</sup>

1) 酪農大伴侶動物医療学 2) 酪農大附属動物医療センター 3) ノースラボ

【はじめに】唾液腺や導管が障害され破裂すると、漏れた唾液が蓄積し、肉芽組織に取り囲まれ唾液腺粘液瘤を形成する。通常、柔らかくて波動感があり、頸部もしくは下顎部で発生することが多い。今回、口底部領域に悪性腫瘍を疑う外観を呈する病巣を認め、2回の組織生検によっても腫瘍を認めず、最終的に唾液の漏出による炎症であった症例を経験したので報告する。

【症例】症例はイタリアングレーハウンド、未避妊雌、12歳齢。飲み水に血が混じり、舌の下が腫れているとのことで来院した。第1病日、舌下部を観察すると、舌小帯から切歯にかけて、左右両側にまたがり出血を伴う病巣を認め、舌への浸潤を認めないものの舌が下から圧迫され変位していた。腫瘍を疑い、全身麻酔下にて切開生検を行ったが、炎症性肉芽組織との診断だったため、第14病日改めてパンチ生検を5カ所行った。いずれも炎症との結果だったため、異物などの原因探求を目的に第23病日に全身麻酔下で病巣観察した。腫瘍を圧迫すると中心部から唾液の漏出を認め、両側の唾液腺の導管が舌小帯開口部手前で破綻していた。唾液が炎症の原因と考え、唾液腺の導管を病巣より尾側で結紮し炎症部位を切除した。術後ステロイドを処方し経過を観察し、第36病日には病巣は縮小し、飲み水に血が混ざることなくなった。ステロイドを漸減し中止し、第81病日現在潰瘍部はわずかに存在するものの病巣はほぼ消失した。

【考察】本症例は2回の組織生検より腫瘍は否定されている中で、炎症の原因を探求し、その原因が唾液腺導管破綻による唾液の漏出であると判断した。一般的には舌下部の唾液腺導管の障害は通常唾液腺粘液瘤（ガン腫）として、波動感がある腫瘍を形成する。しかし、本症例での唾液腺導管の破綻の原因は不明であるが、唾液の漏出によって炎症性肉芽を形成する場合があることが判った。口腔病巣を外観から腫瘍と炎症を鑑別することは困難であり、病巣の生検と原因探求が重要であることを改めて認識した。また唾液の漏出が原因である場合、導管の結紮で病状が改善する可能性があることが本症例から明らかになった。